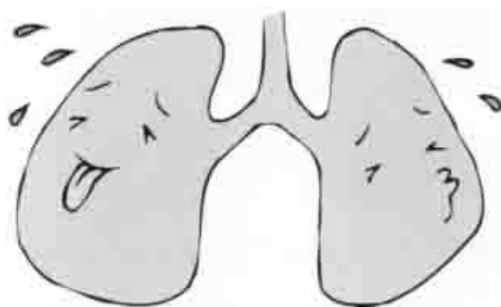


なうために肺は肺胞という細かい部屋に分かれています。肺胞は非常に小さく顕微鏡でないと見えません。この細かい肺胞のひとつひとつの中に空気を吸い込んでいるわけです。肺胞は大変小さくそのまわりの壁は大変薄くできています。非常に薄い壁を通して血液と空気の間を酸素と二酸化炭素は出入りすることができるのです。壁が薄いということが酸素や二酸化炭素が出入りできる理由です。たとえば皮膚のような厚い壁では空気は出入りできません。

肺胞が水浸しになる

肺胞が呼吸に重要な役目をしていることを説明しましたが、この肺胞が水浸しになるとどうなるのでしょうか。呼吸するための部屋に空気がなく水がある状態といえば、とても危険だと思われるでしょう。肺胞の中が水びたしでは呼吸はまったくできなくなります。これは水におぼれて肺に水を吸い込んだ状態と同じです。ところが、腎臓が悪くなって腎不全になると肺水腫といって肺胞が水浸しになってしまうことがあるのです。腎臓が原因で死亡するのは実はこのような状態になっていることが多いのです。



酸素吸入

呼吸するのに大事な肺ですが、腎不全や、透析をしている方は肺胞が水浸しになることがあるというわけです。必要な透析をしないと体の中に水がたまり肺の中も水浸しになりうるのです。このように呼吸がしづらくなったときに酸素吸入という治療があります。少量の場合は鼻カニューレといって、めがねのつるのように細いビニールの中空の管を耳にかけて鼻につけます。

